

# 学校通信 強い網

2016年6/7月号  
新版 第80号  
編集  
駿台甲府高等学校  
駿台甲府中学校  
駿台甲府小学校

## 経験による成長

駿台甲府中学・高校 校長 八田 政久

### 高大接続システム会議「最終報告」

平成28年度になり早くも1学期が終わろうとしています。小学校においては運動会、中高においては学園祭が盛大に行われました。大勢の保護者の方に来校頂き、感謝申し上げます。一つ一つの学校行事を終えるたびに、生徒たちの成長を肌で感じる事が出来るこの職業に改めて感謝しております。生徒自身は、成功や失敗に一喜一憂したかと思いますが、本校の校訓でもありますチャレンジングスピリットをもって取り組んだことは、失敗を恐れない貴重な財産となったはずで、各学校とも生徒の成長を考えると共に、安全管理については細心の注意を払わなければなりません。今まで実施していた行事や種目が、毎年改良されております。その点をご理解いただき、さらに、いくつもの壁を乗り越えていく、精神的かつ肉体的強さも身に付けてもらうために、新たな行事などを企画していきたいと思えます。さらなるご支援を賜りますことを切に願います。

平成28年3月に文部科学省から高大接続システム改革会議の最終報告が公表された。HPで、誰にでも見ることが出来るようになっていて、数十枚に上る報告書と図表で構成されている。多くの教育関係雑誌や資料が様々な形でまとめている。すでに読まれた方も多いと思うが、私の個人的感想は、「こんなもの？」と同時に「まあ、そうだろうな」となった。高等学校基礎学力テスト(仮称)は義務教育の内容も含めた基礎学力の定着と、学習意欲の喚起に向けて高校段階の基礎学力の定着度合いをねらいとした診断型テストとなり、また、現行学習指導要領下の平成19年度から22年度までは試行期間と位置付け、テスト結果は入試や就職に用いないとしている。大学入学希望者学力評価テスト(仮称)は、知識・技能を十分に有しているかを評価しつつ、思考力・判断力・表現力を測定する選抜型テストとなり、複数回実施は見送られ、記述式も限られた範囲での実施という方向で報告された。私たち中等教育の立場からすると、高等教育機関に送り出すための手段として課されるテストなので、できるだけ早期にはつきりとした内容で、具体的な

問題を提示してもらいたいものだ。今回の改革は高等学校教育・大学教育・大学入学選抜の一体改革を目指している。高等学校教育では「学力の3要素」を育むことが要求されている。基礎学力テストで「知識・技能」を診断し、学力評価テストで「思考力・判断力・表現力」を評価し、個別大学の入学選抜では「主体的に学習に取り組む態度」が各大学のアドミツションポリシーに合致するか判断することに。今まで以上に多くのことが要求されるのではないかと、不安に思う声があるが、現在のセンター試験関係者からは「現在のセンター試験でも、年々、思考力・判断力・表現力を問う問題は入っている。学力評価テストになればその割合が増えていくイメージである」と言っている。記述にしても採点の負担を考えれば、当初より縮小傾向にある。

教育が変わろうとしていることは事実である。その風に乗る遅れるわけにはいかない。脱ゆとり教育宣言を文部科学大臣が出したが、総合的な学習を廃止するのではなく、アクティブラーニングという手法でさらに深く「学力の3要素」が問われていくことになる。多くの経験により、真の学力が身につくことはどのような社会でも変わらない事実である。多くの経験ができる場を今後も提供していくと同時に、駿台グループの総力を挙げて正確な情報を速やかに提供していきたい。最後に、我々教職員も、「答えが一つに定まらない問題に答えを見出していく」努力を怠らないようにしたい。

### 海外を訪問して

この半年でオーストラリア・米国・インドネシア・マレーシアを訪問する機会を頂いた。教員生活30年で訪問した国は部で遠征した韓国だけで、研修旅行の海外コースも引率していなかった。生徒たちにグローバルを呼び掛けているので、自分自身も少しは見聞を広めなければならぬ、という思いもあり、日程を調整して訪問した。

オーストラリアには中学生の語学研修団に同行し、現地校にあいさつと姉妹校関係の話が出来た。帰路の飛行機の中で日本の高校で教鞭をとっている米国籍の先生と話す機会を得た。様々な話をした中で「日本の高校がグローバル教育で動いていることは良いのだが、ただ単に英語が出来ることだけではなく、多くの経験を積んで、日本の良いところも忘れないでほしい。」という言葉が印象的であった。米国では一人で行動する機会を頂き、グラントゼロに向かう途中、様々なトラブルに遭遇したが、語学のできない私でも日本で学んだ10年間の英語教育のおかげでたどり着くことができた。困っている私に、日本語で話しかけてくれた現地の人や、単語のみの英語で判断してくれた人。私たちが日本で困っている他国の人々に同じことが出来るだろうか？ 語学を使うことの勇気がグローバル社会に対応する力になることを痛感した。最後に、東南アジアでは高度経済成長期の日本を思い出し、人々のパワーを実感した。これからの社会では、この波に向かっていく力を身に付けなくてはならない。

# 特集 学園祭・運動会

## 第36回ドキドキワクワク駿高祭

高校 普通科 学園祭担当 酒井 竜次

6月9日(木)、10日(金)の二日間にわたり、第36回駿高祭がおこなわれました。今年度は「第36回ドキドキワクワク駿高祭」We are Perfect Students」と題し、文字通り皆が「ドキドキワクワク」できるような、趣向を凝らした企画が目白押しでした。

初日は例年通りコラニー文化ホールで、文化部の発表とクラスパフォーマンスが披露されました。吹奏楽部、合唱部、そして今年度から部に昇格した管弦楽部のみなさんが、それぞれ練習の成果を発揮してくれました。また、生徒会によるオープニング映像、本校卒業生である人気が高いコンビ「オリエンタルジョー」の藤森慎吾さんによるサプライズメッセーやプレゼントコーナーなど、これまでになく企画も用意され、二日間の幕開けにふさわしい発表となりました。



クラスパフォーマンスでは各クラスが短い準備期間ながら、それぞれアイディアを出し合い、くふうにあふれたパフォーマンスを披露してくれました。少し映像に頼りすぎてしまったくらいはありましたが、どのクラスも見ごたえがあり、時間があつという間に過ぎ

てしまう初日の発表でした。総合優勝を果たした3年G組のみなさん、おめでとございます。

二日目は場所を塩部キャンパスに移し、文化部、有志による企画、展示がおこな



われました。今年度から各クラスによる飲食店を原則なくし、より多くの文化部の企画、展示を見て回ってもらえるように、少し企画のルールを改正しました。また、オープニングセレモニーやクイズ大会、そして「未成年の主張」などの生徒会による参加型企画も加わり、皆さんにより楽しんでもらえるようなくふうも見られました。

学校の代表として飲食店ブースを担当してくれた有志団体のみなさん、ゲーム大会や演奏会を企画してくれた有志団体のみなさん、体育館を熱気あふれるサウンドで満たしてくれたバンドのみなさん、そして何より、様々な趣向を凝らした発表、展示、実演、接客を通して、来場のみなさんをもてなしてくれました文化部のみなさん、ご協力ありがとうございました。

保護者の皆様、この二日間、暑い中ご来場くださいまして誠にありがとうございました。今後もお子様方の日頃の練習の成果と、普段は見せない意外な一面が発揮される場として、文化祭がよりよいものになっていくよう、各方面の意見を取り入れながら計画してまいりますので、ご指導よろしくお願いたします。

## ふうふう！授業より普通に駿美祭が好つき〜！

### 高校 美術デザイン科 四條 朋恵

六月十七日(金)と十八日(土)に駿美祭を行いました。今年のテーマは「ふうふう！授業より普通に駿美祭が好つき〜！」で、今流行りのお笑い芸人のネタを振ったテーマとなりました。

一日目は生徒と保護者のみ公開して、各学年と生徒会・実行委員が企画したゲームをしたり、出し物を披露したりしました。一年生は〇×クイズ、二年生は映像作品の上映、三年生はミニゲームを二つ行いました。生徒会からの出し物は二人羽折りや宝探し、全校椅子取りゲームを行い、学年の枠を飛びこえて生徒たちの仲が深まったように感じます。

二日目は一般公開でした。多くの方々にご来場いただきました。誠にありがとうございました。保護者の皆様にはPTA役員の方を中心に模擬店の出品やバザーの品の提供をしていただき、心より感謝しております。一年生はカフェ、二年生はお化け屋敷、三年生は綿あめデイスコ、他にも美術部の缶バッチワークショップや漫画研究部のキーホルダー販売、階段装飾など美術デザイン科ならではの学園祭となりました。

二日目の会場で行いましたコンクルの投票結果につきましては、投票者二百四十名、投票総数千六百三十三票でした。最優秀賞は二年生武川七瀬、二年生進藤穂野香、三年生齊藤かのん、優秀賞は一年生塩島ゆうでした。詳しくはホームページに掲載いたしましたのでご覧下さい。表彰は一学期の終業式の時に、PTAから賞品も贈呈



されます。この学園祭の日までに生徒たちは授業の合間を縫ってそれぞれの分担の準備を行ってきま

一年生は初めての学園祭と言うことで、わからないことも多かったとは思いますが、計画的に最後まで協力して取り組んでくれました。終わった後の感想も皆「楽しかった！」という声が多く充実した学園祭が過ごせたようです。



二年生は中心学年としてクラスの方だけでなく、生徒会の方にも力を注いで頑張っていました。その甲斐あって一日目はとても盛り上がりました。二日目のお化け屋敷も盛況で、リピーターが出る程でした。

三年生は最後ということで、みんなが話し合いをしっかりとって、協力しながら準備を進めていきました。特に階段装飾は立体的で豪華な作品となり、通る人を驚かせていました。クラス全員でおそろいのTシャツも制作し、思

い出に残る学園祭になったことと思いきや、



### 濃密な一分一秒の積み重ね

中学校 羽澤 健

「Keep Smiling」(仲間と過ごす一分一秒)というテーマがとても気に入っています。「仲間と過ごす一分一秒」というサブタイトルがとても良いですね。「仲間と過ごす時間」とせず、「一分一秒」としたところに実感がこもります。「一分一秒」も無駄にせず、充実した、有意義な時間を仲間と共に創作していきたい!という切実な願いが感じられます。仲間とは「そこに在る」という存在ではなく、相互の努力によって築き上げる行為なのです。だからこそ、「一分一秒」の慎重な積み重ねが大切なのです。

さて、今年の駿中祭を一言で総括するなら「濃密な一分一秒」といったところでしょうか。

文化部発表の部では合唱部、吹奏楽部の見事な合唱、演奏は毎年楽しみにしている人が多いのですが、特に今年は特別な印象を受けました。合唱部は駿高生との合同合唱でしたが、美しい声色が体育館に響き渡り、感動で身震いするほどでした。満員の体育館もあんなに静かになる瞬間があるのだと感心させられました。吹奏楽部の演奏は、目で楽しむこともできる工夫がされた演奏・演技で、素晴らしかったです。

特に「Africa ceremony」(song and ritual)は圧巻で、魔法の玉手箱から音が出てくるかのように聴いていて楽しく次は何だ? 次はどうなる? と聴衆をドキドキさせる演奏でした。両方とも、



聴かせる合唱、演奏というよりは、音が、音が調和して迫ってくるという感じが、この合唱、演奏のため、仲間と心をひとつにして必死になって「一分一秒」を重ねてきたのだと感じさせる見事な時間でした。それは学年合唱やクラスパフォーマンスも同じで、発表はほんの一瞬なのですが、そこに行きつくまで彼らは必死になって仲間と濃密な「一分一秒」を重ねています。クラスパフォーマンをとってみると、テーマ決めから始まり、配役の決定、演技の構成、音楽、ダンスの選択等を生徒たちが全て行います。複数の人間がひとつの作品を創作するので、やはりそこには衝突があったり、妥協があったりします。それが原因で仲違いをしてしまう生徒もいれば、妙に気の合う新しい仲間と出会ったりしています。教室の熱気が上がる中、Yシャツをびっしょり濡らしながら、一意専心にダンスに打ち込む生徒たちの横で、「ああでもない、こうでもない」とやり取りしながら動画作成に勤しむ男子たちがいます。教室の端っこでは舞台を飾る大道具を夢中になって作成する生徒がいて、その空間はまさに多種多様な彼らなりの濃密な「一分一秒」があります。そして、皆様に披露する一瞬のパフォーマンスに至るわけです。

我々教員は、もちろん当日の作品も観ているのですが、そこに至るまでの彼らの努力の積み重ねも観ることができる立場にいます。だから、本番でちよつとしたミスがあっても心の底から生徒たちを讃えることができるのだと思います。

駿中祭で今年もまた彼らの人間成長の「一分一秒」に立ち合えた幸せを噛みしめ、これからの彼らの学校生活を「一分一秒」がより充実できるように我々もいっそう気を引き締めていきたいと思います。

### 第15回 運動会

小学校 運動会担当 齊藤隆一

6月18日(土)第15回駿小大運動会を実施しました。今年で駿小の運動会も15回目。今年は施設の都合もあり、これまで実施してきた小瀬スポーツ公園「補助競技場」から「球技場」に場所を移して行われました。会場が移ると児童の演技する位置や動線も変わり、保護者席での約束も改める必要があります。今年の変更点が多々ありました。今年には変更点が多々ありましたが、回数を重ねて洗練されてきた教員の動き、児童の話聞く力や実行力、おたよりで約束事を確認した理解ある保護者の協力により、無事に運動会を成功させることができました。

では「運動会の成功」とは、何を指すのでしょうか。

今年は「燃え上がれ! 4色の栄光、駿台魂」をスローガンに、全校児童が運動会に向けて練習に励んできました。運動会で児童の出番は、低・中・高に分かれての「表現」、かけっこ・リレーの「競走競技」、玉入れ・大玉などの「競争競技」、赤白青黄の縦割りに分かれて競う台風の目などの「全校種目」です。中でも、各学年の男女の代表による4色代表リレーは、運動会後半の大きな山場になります。代表リレーの第1走者は、一年生の女子です。一年生は学年競技が「リレー」ではなく「かけっこ」のため、学年練習ではまっすぐ走ることが求められます。しかし代表リレーでは、トラックに沿って上手に曲がりながら走らないと自分の走力を発揮できません。練習の様子

を見ていると、最初はカーブが上手く曲がれず、なかなかスピードに乗りきれていませんでした。しかし、練習を重ね、本番を迎えると、見事にトラックに沿って走ることができていました。このようにできなかったことができるようになる『個の成長』、それこそが「運動会の成功」の一つだと考えます。

また、運動会中、児童テントにいる子どもたちの目線を追うと、目線は「得点板」に注がれていました。みんな自分の色組(チーム)の順位が気になっていました。運動会では、チームのために自分の全力を出し切ります。その結果がチームの得点につながっていくため、「優勝」という結果をみんなが一つになって求めていきます。その「本気」があるからこそ、盛り上がり、面白いのです。そして、最終順位が発表されたときに、「本気」の感情が爆発します。優勝した青組団長の歓喜の涙が印象的でした。また、その結果を求める過程で多くの「経験」を得ます。それは「集団だから学べること」であり、子どもたちがそれを得られたこと「運動会の成功」だと考えます。

そしてなにより子どもたちにとって励みになるのは「家族の応援」です。自分の家族や親戚が自分の演技や動きに声援を送ってくれ、お昼には、心がかもったお弁当を用意してくれている。運動会とは、家族の絆を再確認できる場でもあるのではないのでしょうか。

快晴の下に行われた運動会は、子どもたちにとって得るものが多い行事であり、その経験は、これからの学校生活でも必ず生きてくると思います。

## 特集 県中・高総体

### Fuji Power ～限界の先へ～

中学・生徒会担当 武川 公貴

去る六月十七日(金)・十八日(土)の二日間にわたって、第六十五回甲府市中学校総合体育大会が、雨上りの晴天の下、甲府市内の各会場にて開催され、本校からは十競技に十五団体が参加しました。



今年度は例年より一週間ずれたことで行事の日程が変わり、駿中祭の翌週開催となりました。駿中祭の準備期間と重なり、部活動の練習時間の確保が難しい中、各部とも三年生を中心に朝練等の限られた時間を上手に使い、一生懸命に練習に取り組んでいる姿が印象的でした。

三年生は、市総体で勝利し県総体の切符を手にしなければ、これが中学校生活最後の大会になるため、大会に先立って行われた壮行会での決意表明にも力が入っていました。大会当日は、これまでのクラブ活動の集大成として、生徒一人ひとりがそれぞれの場所・場で「やる時はやる駿中生」精神で、

持てる力のすべてを出し尽くし、各会場で熱戦が繰り広げられました。

各部の結果は中学校のホームページに掲載しています。惜しくも県総体出場を逃した三年生は、この市総体を以て実質引退となります。三年間のクラブ活動では、沢山の仲間と出会い、楽しかったことや苦しかったこと、さらには勝利の喜びや負けたとときの悔しさなど、授業では学ぶことのできない経験をすることができたと思います。クラブ活動で培ったものを今後の様々な場面で発揮してくれることを期待しています。二年間本当にお疲れ様でした。

七月二十五日(月)から開催される山梨県中学校総合体育大会には、男子ハンドボール部・女子ハンドボール部・男子テニス部(団体・シングルス二名・ダブルス一組)・女子テニス部(団体・シングルス三名・ダブルス一組)・男子卓球部(団体)・女子卓球部(団体)・男子バレーボール部・陸上競技部(四名)・水泳(四名)・柔道(一名)が出場します。駿台甲府中学校の代表としての



誇りと、県総体に出場できなかった仲間の想いを胸に、県総体に臨んで下さい。大会での更なる活躍を期待したいと思います。今後とも皆様の温かいご声援をよろしくお願致します。

## 『雨』の県総体

高校 生徒会担当 小高 淳

生徒会を担当して2年目。高校総体に生徒会としてかわるものも2回目ということになりました。昨年は、様子がわからず、準備段階から右往左往しましたが、今年は忘れ物もなく、初日を迎えることができました。しかし、実は、昨年より一つ個人的な仕事が増えてしまいました。それは、来年度、駿台が総合開会式の当番校ということで、今年度は来年のために、開会式の役員になったのです。

さて、初日。雨のため1年生の応援が無くなりましたが、生徒会の仕事は変わりません。7時からのテント張りは、今年は生徒会も集まってくれて、陸上部任せにならずに設置できました。そして、恒例の各校との生徒会誌の交換。今年もたくさん的高校と交流ができて、生徒会誌ももらってきました。(職員室入口近くに各校の生徒会誌があります。ぜひ見てください。)また、昨年はいくつかの高校でマスコットを連れてきていたため、駿台でも『駿太くん』をスタンバイしておいたのですが、雨のため出動できませんでした。もちろん、各校のマスコットも今年は居ませんでした。

生徒会の生徒たちは、小瀬で行われ

ている各競技の応援に出かけたり、テントで別会場で行われている競技の結果を受けて、テントに掲示をしたりしました。陸上では、短距離を中心にハイレベルな戦いが行われ、その中で駿台の選手も大活躍をしていました。また、昨年18時ころまで決勝が長引き、最後は負けて準優勝だった男子硬式テニスも、今年はいよいよ早い時間に優勝が決まりました。その他の競技でも、駿台の選手たちは全力で戦ってくれました。総合成績は、男子は昨年同様の5位(得点20)、女子は昨年の3位から6位(得点13)という結果でした。選手のみならず、お疲れさまでした。

このあと、各部では、関東大会や、インターハイ予選を戦いました。ハンドボールのインターハイ予選では、会場が日川高校、女子の決勝の相手も日川高校ということで、『完全AWAYをHOMEにしよう』と、生徒たちに呼びかけ、応援に出かけました。野球部、サッカー部が駆けつけてくれ、一般生徒、生徒会、保護者で応援をし、体育館全体を駿台HOME状態にすることができました。残念ながら女子は惜敗してしまいましたが、男子は24年連続24回目のインターハイ出場を決めました。今後も野球応援を含め、文化部の発表会・公演にも出かけて行き、駿台の生徒たちが最大限の力を発揮できるように、全力でサポートしていききたいと思います。

